

出雲国式内穴道神社(『風土記』穴道社)をめぐる社論 (二) : 三崎神社・大森神社を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 服部, 旦 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1410

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



出雲国式内宍道神社（『風土記』宍道社）をめぐる社論（二）

——三崎神社・大森神社を中心として——

服部

旦あき

本論文は、『大妻女子大学紀要—文系』第31号（平成11（99）年3月、東京）に掲載した（一）（以下「前編」）の続編である。本論文は目次に示した第4章第5節から始める。論文に使用する地図・図版は前編の巻末にまとめて収録したから、これを対照して頂きたい。本論文の研究目的は前編の「はじめに」に記した。本論文に用いる文書等の解説は前編第1章に記したから再述しない。使用する史料番号は、拙稿D～F論文（前編「はじめに」参照）並びに前編からの続き番号である。

目次

はじめに

一 文書③・⑭～⑳解説

二 宍道神社をめぐる両大坪家と宍道家の社論史料紹介

- (一) 史料113 『宍道神社ニ係ル雜記』収録
- (二) 史料114 『宍道神社ニ係ル雜記』収録

出雲国式内宍道神社（『風土記』宍道社）をめぐる社論（二）

(三) 史料115 『宍道神社公文立証伝記』収録)

(四) 史料116 『延喜式彙宍道神社記』

(五) 史料117 『宍道神社差出書』収録——附「明治3年時における女夫君信仰」(注<1>)

三 大森神社「説」の論拠とその検討

(一) 大森神社旧社地「神籬坪」伝説

(二) 佐々布本郷『風土記』宍道郷本郷「説」

(三) 神籬坪から大森神社への遷座「伝説」

四 三崎神社「説」の論拠とその検討

(一) 三崎神社・氷川神社の大字宍道・白石「総氏神」伝承

(二) 三崎神社社名「三津ノ崎」語源「説」——附「女夫君信仰の断絶」(注<13>)

(三) 三崎神社社号に関する私見

(四) 白石村(?)からの遷座「伝説」——附『出雲国風土記』の方位のずれ資料(注<15>)

以上『大妻女子大学紀要—文系』第31号掲載

(五) 氷川神社社山からの遷座伝説

本節途中まで本誌掲載

五 三崎神社宍道(神)社説成立の可能性の検討

(一) 地名字猪道山の信憑性

(二) 棟札類による裏附けの可能性

結

以上第4章第5節途中から『藝林』第48巻2号掲載

四 (五) 水川神社社山からの遷座説

前編第4章第4節において、白石村(7)からの遷座「伝説」に明確な根拠のないことを明らかにした。しかし、そのことによって、併せて記されている水川神社社山からの遷座伝説も最初から考慮外に置くこともできないと考える。即ち、前編図(10)は図(9)の部分拡大である。ここには、水川神社の社山竜臥山の右(南)側の斜面を手前(西)の山裾から上方(東)へ登る道の如き2本線を引き、その下に「此所宍道神社旧迹猶存セリ」と記している。

この水川神社社山から字猪道山^{イェノノツヤマ}地図(1)(2)図(7)3の地に移ったとする伝説を記すのは113 F G・114 P Qである。即ち、

113 F 宍道神社転社ノ所謂ハ栗原新左エ門ト云フ者ノ祖先当時ノ豪家ナルヲ以右社ノ陵遅ヲ再興セント持分ノ山ヲ社地ニ寄附シ今ノ所ニ移シ奉リシ也夫ヨリ新右^{ウツ}エ門家ハ世々不抱盛衰同社遷宮ノ節ハ分外ノ扱向モ於于今不変

113 G 宍道神社モ朱引一括ノ内ニオイテハ竜臥山ヨリ已前ノ旧地ト思ヒヨル僻見ノ地モ御座候得共(後略、服部)

114 P 今ノ宍道宿ニ移してより神体も同しく今の水川神社の社山ニ移し^{ウツ}祭りて(後略、服部)

114 Q 然ルニ祇園社ハ領主崇敬ゆへ神威日増ニ式内宍道神社ハ其衰微ノ体ニ相成候ニ付慶長ノ頃栗原某ト申者三丁斗リ南ニ当リ候持分ノ山ヲ寄附シ此地ニ移奉ル

『明細帳』は、峰清注によれば明治12(1879)年〜明治14(1881)年にかけて作成されたものである(C論文146頁上段12行目〜13行目。E論文69には「明治十四年社寺明細帳」とする)。三崎神社は当時はそれまでの両大坪の共同管掌を止め後大坪家(大坪高津)の管掌となっていた(E論文33頁下段3行目〜14行目。但し、祭りにも前大坪家が参加していない記録は目下のところ見えない。公的書類上のみ分離ということもあり得る)模様であるから、『明細帳』121「社地追々沿革アリシカ中昔龍^{ウツ}伏^{ウツ}山ヨリ今ノ社地三崎又ハ猪道山トモ云フ地ニ移シ奉ル」の記載は、高津が(113)114を要約したものと思われる。従って、121は113

114の裏附けとはならない。

三崎神社は、これまで見て来た如く、「明治8年〜9年作成と推定」⁽¹⁹⁾（本章注〈11〉書解説）の「宍道町村絵図」図(7)3には「宍道神社」として記され、121の如く「四百坪」の境内と「桁一間梁五尺八寸」の本殿も実在していた。峰清が明治30（1897）年（月日無記）に提出しようとして作成した（提出は中止の旨を記す）大森神社の宍道神社「社号改名及昇格之請願」中にも次の如くある。

130 一無格社 三崎神社 御前宝社中津祇園社中津ノ宮ト云フ是ヲ宍道神社ト云

神社ハ社殿一宇
附屬建物ナシ

社地ハ右イセシ山地名ヲ俄然猪道山明細
左雲松寺山帳云ト書セリ雲松寺境内ト双テ右墳墓ノ間ヲ貫キ切斷シテ馬場アリ社アリ宍道

町ヨリ東方ニ離ル、事二丁余此山脈ハ竜臥山ニ属セリ西方ニ川ヲ挾ンデ対スル山脈ヲ竜化山ト云フ

出雲風土記曰宍道川
雲陽大教誌曰佐々々々川是ナリ

（文書⑧『宍道神社公文立証伝記』10丁ウ）

113附図の図(9)に描かれた「宍道神社」に登る道の一部は現在も残っている。即ち、130に「左右墳墓ノ間ヲ貫キ切斷シテ馬場アリ」とする道は、図(7)(11)矢印5の直線で、今も雲松寺の墓地の間を貫いて山裾に達している。山裾からは石段で雲松寺本堂前に登る。この「馬場」に沿った左（北東）側に図(7)(11)W「馬場屋敷九百十一」「馬場屋敷九百十二」と記されており、これは地図(3)Wの「小字馬場屋敷」と対応する。この直線道の5「馬場」は北西側に大正7（18）年簸上鉄道が敷設されたが、今も残存し使用されている。秦武男氏もこの道を「馬場」と呼ばれた（平成9（1997）年8月12日）が、右の如く文献的にも裏附けられる。

けれども、図(9)(10)の「宍道神社旧迹猶存セリ」と記した上方に引かれた2本線の、水川神社の社（裏）山へ登る道のようにも見える道に該当する道は、「宍道町村絵図」図(6)1には描かれていないし、宍道町役場税務課所管『字限図』（図(3)(11)は

後の調製（転写？）本。原本の作成年と作成者は無記入。黒田祐一氏は明治8・9年の作成と推定しておられるという。……宍道町役場持田昌良氏・稲田信氏）の図(8)も同様に描かれていない。

秦武男氏によると、

131 氷川神社の裏山は小さな山で、頂上に「オノ神さんの土盛りがあり、そこへは山道で上った。敗戦前、5月25日の天満宮の祭りの時には子供達が弁当を持って登り、そこで食べて遊んだものである。私よりも2、3才年上の人は知っている。子供達は山の頂上で木で枠を作り小屋掛けし、小屋の中で遊んだ。戦争中には食べる物が不自由だったので弁当は食べなかった。この時の記憶では、山の中に旧社地はなかった。そこへ通ずる参道もなかったし、参道の跡もなかった。氷川神社の裏山には右の「オノ神さん」の土盛り以外には何もなかった。（平成9（'97）年8月11日談話）

という。

秦氏の話が明治初年にも溯り得る事実で、図(9)(10)の2本線が道を表現しているのであれば、これは社論に際して両大坪が造作した可能性が生まれる。また、2本線が道を表現したものでないのならば、図(9)(10)の氷川神社の山の左（北西）側に引いた3本線と同様の描線となる（但し、2本線の角度は3本線と異なり山裾に添っていないから、疑問が残る）。

しかし、図(6)「宍道町村絵図」に描かれた道（赤色で表現されている）は当時実際に利用されていた公道を示しているものであるからであろう、秦氏の子供の時に氷川神社の裏山に登ったという山道は図(6)には描かれていない。図(8)『字限図』も同様である。また、三崎神社旧社地3が『字限図』の図(11)に特に「九一九ノ二」番地として示されているのは、この図が作成された当時はまだ実際に社殿があり祭祀が行われていたからである。『字限図』の図(8)―Jに「宍道神社旧迹」に当たるものが描かれていないのは、当時社地としての登記がなされていなかったためという可能性もある。また、『字限図』の図(11)には3三崎神社の社地を記載するものの、図(11)5「馬場」以外にはそこに通ずる参道は記されていない。

従つて、図(6)(8)に参道や旧社地(「宍道神社旧迹」)に相当するものが示されていないからと言つて、それらがなかったとは目下のところ断定できない。明治最初期と秦武男氏の記憶の戦争中との間は約96年を隔てているし、大正7(18)年秦家が後大坪家の神職を継いだ時には何の引き継ぎもなされなかった(本章注(7)・D論文23頁(3))から、両大坪家のこの旧社地伝説が秦家に伝わらなかつたという可能性も考えなければならぬ。伝承力というものも、口承の場合(時には文書があつても)必ずしも強いとは限らない。例えば、女夫岩遺跡も、平成8(96)年7月に発掘調査がなされて初めて巨岩下方(西方)に祭祀に係わりあると思われる(祭壇とその下(西方)に広い削平された平坦地のあつたことが明らかとなつた⁽²⁰⁾)。それまでは、草木に埋もれ、私の知る限りではこの遺構を記憶している人はなかつた。ところが、前編第2章注(1)に述べた通り、117明治3(1870)年7月当時女夫岩は「講中ヲ以祭」られ、その祭祀を前大坪が担当していたのである。この事實は両大坪家が宍道村から去つた後は秦家にも住民にも伝わつていなかった(本章注(13)の「女夫岩信仰の断絶」が原因であらう)。

以上により、「宍道神社」を氷川神社社山から遷したとする伝承を裏付ける物証は目下のところは管見に入らず、113F「栗原新左エ門ト云フ者ノ祖先……右社ノ陵遅ヲ再興セント持分ノ山ヲ社地ニ寄附シ今ノ所ニ移シ奉リシ也夫ヨリ新右エ門^(ウヰ)家ハ世々不抱盛衰同社遷宮ノ節ハ分外ノ扱向モ於干今不変」および114Q「慶長ノ頃栗原某ト申者三丁斗リ南ニ当リ候持分ノ山ヲ寄附シ此地ニ移シ奉ル」という、両大坪家の伝承と明治初年における栗原家に対する特別待遇の慣習のみが根拠となる。そこで、以下において栗原家の人物を棟札から探し、その人物の社会的地位およびその変化を調べ、真偽の程を検討することにする。

まず、117Fに「新左衛門と心を合計置候事と奉存候」とあることで、明治2・3年当時栗原新左衛門という人物が実在したらしいことが判る。実際、下記145棟札銘文に同名同名の人物名が見える。宍道町における栗原姓の数と分布を町内の電話帳(平成7(95)年宍道町教育委員会提供コピー。作成年無記。「公社・有線」と記しているから、昭和60(85)年4月1日のNT

T創立以前の作成である)で調べると、

大字宍道12戸・大字昭和3戸・大字白石1戸・大字東来待2戸

となる。次に、秦武男氏によれば、

大字宍道13戸・大字昭和4戸・大字白石2戸・大字東来待2戸 (平成10(98)年5月12日消印葉書)

である。

これによると、栗原新左衛門はかつての大字宍道町か大字宍道村の地に居住していた可能性が大きい。秦武男氏は、「栗原家の功績と特別待遇については初耳で、栗原姓の人に尋ねましたが新左衛門家が今のどの栗原家に当たるかも判りませぬ。」(同右葉書)と言われる。

そこで、『水川神社棟札類写』と『両祇園社棟札写』、木幡修介氏蔵の5枚の棟札(水川神社(北ノ祇園社)4枚・三崎神社(中津祇園社・「宍道社」1枚)から栗原姓の人物の見える棟札を年代順に見てゆくことにする。栗原姓の人物の社会的地位(およびその変遷)を知る必要があるから全文を翻刻する。但し、『両祇園社棟札写』は、前編第1章に述べたように本願を初めとした代表的人物達を中心に記載したものであるから、省略がある。本『棟札写』中の〈〉は注記・《》は朱注である。なお、栗原姓の人物をゴシック体とする。

132 寛永廿年(文化三年迄百六十四年)

〈五〉

庄屋 栗原助次郎

太守直政公

同 小豆澤彦五郎

下村 久右衛門 町年寄名

目代 惣兵衛

〔西祇園社棟札写〕 2丁ウ。寛永20（1643）年棟札。神社名を記していない。北ノ祇園社と推測される。

〔梵字〕 奉上葺
 聖主天中天迦陵頻伽声
 当社祇園牛頭天王御社 一字
 勲力檀那中十二氏子 大工渡辺中三郎藤原慶次 鍛冶文殊庄衛門
 御国主松平出羽守 源朝臣直政公
 哀愍衆生者我等今敬礼
 御代官篠原小兵衛 神主大坪大和平朝臣宗重並ニ大坪中務省次久

〔裏〕

町之

小豆澤与市郎

木幡屋五郎作

御本願年寄衆

木幡屋三四郎 並五ヶ村中

勝代吉兵衛

庄屋小豆澤市右衛門

丙

十二月十九日 遷宮畢

木幡屋新三郎

目代

野津惣兵衛

（木幡修介氏蔵、北ノ祇園社正保3（1649）年12月19日上葺棟札）

134 寛文三卯夏棟札（文化三年迄百四十四年）

〔七〕

神主大坪内記

完道庄屋

与頭堀江七左衛門

栗原仁左衛門

小豆澤五右衛門

年寄 仁田与兵衛

木幡屋利右衛門

同 清水市右衛門

目代 山田与二右衛門

〔西祇園社棟札写〕 3丁ウ。寛文3（1663）年夏棟札。神社名を記していない。北ノ祇園社と推測される。

135 元禄三庚午年

〈文化十一戊迄 百二十五年〉

〈享和三亥マデ 百十四年〉

〔八〕

小豆屋源右衛門

枚谷与兵衛

木幡屋吉三郎 《淨意若名》

葉山与市郎 《淨字若名後与三郎与逸》

奉建立宍道社一宇小豆澤与一右衛門 《宗富》 小豆澤五右衛門

〔祇園社也〕 木幡屋三七 《灘木幡屋》

栗原十左衛門

増田七三郎

勝代善四郎

〔『西祇園社棟札写』 4丁才。元禄3 1690 年宍道社 中津祇園社 建立棟札〕

11 (E論文)

〔棟札裏銘文は省略、11参照〕

当社石築地米錢^② 寄進糸川八良兵衛

葉山屋与三郎

勝代善四郎

高砂屋与兵衛

小豆屋五右衛門

木幡屋吉三郎

木幡屋三七

栗原十左衛門

清水与次兵衛

増田七三郎

栗原六左衛門

糸川八郎兵衛

栗原善左衛門

古割兵右衛門

大工

小豆澤市良右衛門

祠官

大坪丹後守平重久

目代

庄屋

組頭

町老

同

地方

年寄

□

悪魔降伏

奉建立稻荷三神靈廟一宇

万徳圓満

出雲国式内宍道神社 (『風土記』宍道社) をめぐる社論 (二)

(元禄8 1695) 年4月吉祥日稻荷三神靈廟建立棟札

《享保元年ナリ》

正徳六丙申三月

庄屋喜右衛門

小豆屋金松《松江小豆屋浅右衛門勝郷後》

椀谷甚七

正徳六年丙申三月

《享和三年マデ八十八年》
《文化十一戌迄九十九年》

木幡屋与右エ門《浄貞道良》

《省略附号》

《九》

葉山屋与三郎《浄宇》

奉修覆完道社一宇小豆澤与市右エ門

《宗富》

同平兵衛《儀古》

《祇園社也》

《好山》

《小豆屋午二郎祖父》

木幡屋理右エ門《灘木幡屋》

中澤七右エ門《小福葉山屋》

増田七三郎

栗原重左エ門

奥村柳庵

〔F論文88《省略アリ》の全文〕

〔表〕

〔西祇園社棟札写〕5丁オ。正徳6《1716》年3月宍道社《中津祇園社》修覆棟札

下津磐根仁宮柱太敷立豆

社司 大坪豊記利久

奉造立 雲陽意宇郡完道郷客大明神一宇国君松平幸千代公

高天原仁千木高知豆

大工 梅田平六

〔裏〕

葉山善右衛門

天長地久

目代 増田権七

時 享保二十^乙卯曆三月朔日 町年寄 木幡屋与右衛門
本願 小豆澤与市右衛門勝富 十二氏子
杖谷甚七

社頭安康

庄屋 古割助治
年寄 栗原仁左衛門
同 糸川弥三右衛門

(享保20〔1735〕年3月朔日客大明神造立棟札)

138

〔表〕

下津磐根^仁宮柱太敷立^互

社司大坪豊記利久

町年寄 小豆澤与一右衛門
木幡屋与右衛門

奉修覆稻荷三所大明神一字国君松平幸千代公

同 目代 増田権七

高天原^仁千木高知^互

大工 北脇小平

庄屋 古割助治
年寄 栗原仁左衛門
同 糸川弥三右衛門

〔裏〕

時 享保二十年^乙卯孟夏廿一日 邑中十二氏子

(享保20〔1735〕年孟夏21日稻荷三所大明神修覆棟札)

139

〔表〕

下津磐根^仁宮柱太敷立^互

社司大坪長門富久

奉修覆雲陽意宇郡宍道郷客大明神一字 太守松平出羽守源宗衍公

高天原^尔榑木高知^互

大工 加納円七

出雲国式内宍道神社(『風土記』宍道社)をめぐる社論(一)

〔裏〕

天長地久

葉山善右衛門

奉加頭取

糸川与一兵衛

目代 小豆屋平兵衛

新田与七

干時寛延三庚午 載三月十二日

町年寄 木幡与右衛門
本願 小豆澤与市右衛門 十二氏子

小豆屋清助

社頭安康

庄屋 枚谷清四郎

古割太兵衛

年寄 高田治良右衛門

伊原徳三郎

同 栗原与右衛門

筆屋善右衛門

〔寛延3 (1750) 年3月12日客大明神修覆棟札〕

140 (F論文91の棟札表全文。棟札裏については91に全文紹介したから、本研究に必要な「志主」の箇所のみをここに91から引用する)

〔表〕

本願 小豆澤与市右衛門

葉山善右衛門

町老 木幡屋祖右衛門

組頭 枚谷与兵衛

神主 大坪多伝治意

大野権右衛門

社奉行

中根兵馬

底津磐根^仁宮柱太敷立^与

奉造立雲陽意字郡完道郷稻荷三所神靈一字国君出雲少将宗衍公

高天原^仁千木高知^与

目代 小豆屋平兵衛

庄屋 野津文七

年寄 延野屋惣十

稻村嘉右衛門

施工 伊藤文吉

〔裏〕

上田武右衛門
木幡新三郎
新田与七
田中彦十
伊藤安左右衛門
長谷川捨松
石原彌三右衛門
内藤平右衛門
勝部重左右衛門
宮廻彦五郎
清水市郎右衛門
今岡伊兵衛

木屋伊右衛門
古割新蔵
栗原喜左右衛門
同 与左右衛門
同 彦右衛門
新田藤四郎

〔宝曆 8 (1758) 7月7日稻荷三所神靈一字造立棟札〕

〈十一〉

〈文化十一戊マテ 四十二年〉
〈享和三亥マテ 三十二年〉
明和九壬辰十月十一日
〈安永元年也〉

〈完道〉

祇園社棟札

目代
庄屋
町年寄
町年寄

宮廻彦五郎信惟
葉山善重郎房尚〔後清助、房義〕
木幡卯兵衛照良〔後久右エ門、喜三郎〕
葉山善右衛門尚房〔淨信〕
小豆澤与一右衛門勝紀〔良慶〕
木幡与右衛門親良〔後平田木佐相統、徳三郎永久〕
栗原善八富居

小豆澤源久郎
木幡屋新三郎
木屋太郎左衛門
古割新蔵
宮廻権右衛門
小豆澤午次郎
小豆澤孫四郎〔勝紀舎弟、勝喜〕
新田清左衛門
高田屋吉右衛門

〔表〕

〈三保邦久書〉

枚谷興藏
奥村柳澤
布野東英

清水和吉
伊原安左衛門
八国屋多吉

〔西祇園社棟札写〕7丁才。明和9〔1772〕年10月11日〔宍道〕祇園社〔北ノ祇園社?〕棟札

下津磐根 仁宮柱太敷立知

遷宮安座幣頭遠藤河内正歳演

庄屋 宮廻千三郎
目代 杉谷丈三郎
町年寄 葉山正助春方
町年寄 葉山清助房尚
葉山小市郎
葉山与三郎重農
古割新蔵
木幡屋源六
延野屋惣十
木幡屋与平次
上田新十
小豆沢寛兵衛
木幡定兵衛
木屋太郎左衛門

奉修覆雲陽意字郡完道祇園社一字国主出雲少将治郷公 社奉行

高天原 仁千木高知 豆

乙部次郎兵衛
大野権右衛門
小豆澤与市右衛門勝珍小豆澤元次郎◎
神主 大坪中書平定久
大坪左京平筆久
木幡与右衛門将良
足立源助
木幡喜三郎照良
宮廻甚七
栗原嘉左衛門
新田夫蔵
奥村柳庵
高田屋次郎右衛門
清水儀蔵
伊原多兵衛
八国屋友十
葉山屋清蔵

本郷

内藤半十

内藤与兵衛

小豆沢清五郎

内藤弥右衛門

◎白石五箇村

庄屋 小豆沢和右衛門

年寄 小豆沢甚蔵

小豆沢助右衛門

小豆沢甚助

持田佐助

坂口
年寄

伊原善左エ門

大田与三右エ門

伊原兵右エ門

大田仁左エ門

伊原作左エ門

金山
年寄

伊原与次兵衛

福田林次

高木与三郎

高木林太

高木藤五郎

野々村喜左エ門

下倉
年寄

曾田小左エ門

内藤長右エ門

曾田九郎右エ門

森山利右エ門

内藤喜十

小豆沢文十

佐為
年寄

川嶋太市

川嶋忠左エ門

川嶋十兵衛

川嶋庄右衛門

小豆沢林三郎

稻林惣左エ門

稻村庄三郎

川嶋祐蔵

〔裏〕

木屋太郎左エ門

金山屋彦六

鍛冶屋太郎右エ門

延野屋宗十

高田屋次郎右エ門

木幡屋定兵衛

木幡屋覚三郎

大工 伊藤円次

檜皮 秋鹿大野村 佐助

天長地久

干時文化三年 丙寅

三月八日

完道村町五人組

小豆沢之外親子之名前書記候例無之候得共葉山

出雲国式内宍道神社（『風土記』宍道社）をめぐる社論（二）

木幡兩家此度限後例仁不相成旨無余儀頼仁付
右兩家共親子之名前相記仍後年為証拠良席
以自筆写右意趣書記置者也

美島屋善三郎
針屋仙蔵
大田屋作右工門
糸川屋儀左工門
稻村惣太

(木幡修介氏蔵、文化3〔1806〕年3月8日祇園社〔北ノ祇園社?〕修覆棟札)

143 〔表〕

下津磐根仁宮柱太敷立_三

奉修覆雲陽意宇郡完道郷稻荷大明神一字国君松平出羽守源治郷公

社奉行 伊藤甚左衛門
乙部次良兵衛 神主大坪左京平筆久

高天原仁千木高知_三

遷宮安座幣頭遠藤河内正源穢演 *

*本願 小豆澤与市右工門 栗原喜右工門

葉山与三良 伝右工門

〔裏〕

伊原柳助

木幡与右工門

千時文化六年

葉山清助

天長地久

勸化世話人

葉山七助

己九月廿七日

足立孫左工門

枚谷丈三良

栗原与左工門

田中利助

渡部増兵衛

宮廻甚七

新田夫蔵

足立源助

新田定兵衛

宮廻次良兵衛

糸川源七

小豆屋孫四良

檜皮

小豆屋新重

伊藤円次

(文化6〔1809〕年9月27日稻荷大明神修覆棟札)

〔表〕

下津磐根 仁

奉修覆正一位稻荷大明神一字国君松平出羽守源斎貴公

社奉行 堀彦右衛門
早川太兵衛

本願小豆澤与市右衛門勝貞*

宮柱太敷立三

神主大坪播磨平富久

森脇屋万四郎
佐々布屋庄十
木幡屋勘兵衛
田中理左衛門
木幡久右衛門
宮廻慶一郎
葉山理右衛門
学頭屋五郎兵衛
小豆屋理七
小豆屋伊兵衛

〔裏〕

宮庄屋足立孫左衛門

小豆屋甚左衛門

白石村庄屋
梶谷与三右衛門
佐々布村庄屋
三嶋周兵衛

栗原嘉左衛門

小豆屋慶八

白石村金山年寄
福田善藏

天長地久 新田屋定右エ門

坂口年寄
太田与三次

延野屋宇三郎

川嶋与次兵衛
曾田小助

鍛冶屋広兵衛

下倉年寄

*嫡子

小豆澤与市郎

十二氏子

木幡屋儀藏

佐々布屋為藏

古川屋源兵衛

山本屋三郎兵衛

出雲国式内宍道神社 (『風土記』宍道社) をめぐる社論 (二)

木幡屋五左衛門

糸川屋金兵衛

// 本郷年寄
内藤覚助

土屋源八

新田屋藤重

(年月日無記(幕末。安政2年9月13日客大明神修覆棟札、および14慶応元年5月28日稻荷大明神再建棟

札にも本棟札と同じく「檜皮大野村佐助」・「檜皮秋鹿郡大野村佐助」とある) 稻荷大明神修覆棟札)

145 (下論文105の全文)

[表]

遷宮安座幣頭大坪主馬平章久執之

下津磐根^仁

奉再建正一位稻荷大明神社国君松平定安公

社奉行 高井兵太夫
渡部治太夫 ※

宮柱太敷立^三

神主 大坪帯刀平良久

八国屋伊左エ門

財満屋伝四郎

木幡屋佐平太

葉山屋儀之助

古割屋清兵衛

大坪行藏

大廻屋仙右エ門 講 足立孫左エ門

宮廻権左衛門

木屋半六

木屋久兵衛

小豆屋理七

木幡久右衛門

奥村柳泰

※本願小豆澤九郎右衛門勝実嫡子小豆澤金一郎

土屋新重

田中吉兵衛

清水屋又市

鍛冶屋勘十

木挽大谷屋源助

大工栗原福重

男勇七

新田屋武右エ門

高田屋久四郎
葉山屋礼藏
坪内通博
木幡屋丈助
森脇屋平七
木幡屋三七

小豆屋吉郎兵衛
桶屋工市
富田屋喜七郎
古割屋円藏
山根屋宗兵衛

新田屋林十
栗原屋新左工門
小豆屋秀平
檜皮
秋鹿郡大野村
佐助

〔裏〕

干時慶応元年
巳閏五月廿八日

当所
目代 三七
庄屋 順藏
年寄 久四郎
同 節藏

白石村
庄屋 佐平
年寄 権八
同 太四郎
同 祐四郎
同 平助
同 喜四郎

東来待村
庄屋 嘉藏
年寄 権助
同 彦四郎
同 惣太郎
同 磯太郎

林村
庄屋 夫助
年寄 延助
同 与助
同 円七
同 磯太郎

湯町
面白村
目代 本右工門
庄屋 柳助
年寄 平左工門
同 弥右工門
同 与三郎

天長地久
与頭永原市右衛門善順

下郡松浦宇右衛門
佐々布村
庄屋 長右工門
年寄 嘉十
同 宇助
同 伊藏
同 惣右工門

西来待村
庄屋 鹿之助
年寄 林左工門
同 周兵衛
同 久藏
同 佐一右工門

上来待村
庄屋 善市
年寄 甚右工門
同 与右工門
同 福助
同 唯市

大谷村
庄屋 岩三郎
同 善助
同 祐藏
同 善右工門

以上十二氏子

伊志見村
年寄 源三郎

同 久藏
同 佐一右工門

同 善右工門

(慶応元(1865)年閏5月28日稻荷大明神社再建棟札)

〔表〕

千家殿名代坪内忠臣

奉建立正一位清向稻荷大明神 神主大坪万寿男平良久 本願小豆沢浅右工門源勝栄

〔裏〕

小豆沢九郎右工門 木幡屋丈助

富田屋喜七郎 小豆屋真兵工

天長地久干時明治三年午 四月七日講中大藏屋吉兵衛 小豆屋佐助 大工 伊藤屋徳右工門

木屋久兵衛 堀江屋太郎兵工 大坂屋只兵工

財満屋伝四郎 山根屋宗兵工 木挽 大谷屋源助

(明治3〔1870〕年4月7日稻荷大明神建立棟札)

〔表〕

勝部宗之助

中 土江源八

渡部忠次郎

遷宮安座神官大坪高津執之

講 新田千蔵

新田源七

下津磐根仁

栗原喜平

玄行伴兵工

奉修覆正一位道守稻荷社一字

本願

小豆澤金二郎源勝生

渡部勘兵工

宮柱太敷立互

慶応二寅正月加入

大工 犬山周兵工
木挽 糸川清蔵

〔裏〕

講 田中吉郎
佐藤久兵衛
中 齋間扇之助

葉山義之助

当所戸長 小田林左工門

用係 葉山雄次郎

佐々布 戸長野津良一郎
伊志見

用係三島丈一郎

当所

小田林左工門

佐藤太兵工

大坪行蔵

土江庄兵工

長富利助

内藤甚平

葉山礼蔵

葉山三七

高田吉右工門

奥村樵哉

木幡吉左工門

安槻源之助

中田平左工門

庄司長太

伊志見村

持田利左工門

持田源次郎

佐々布村

家原猪太郎

江尻太一右工門

江藤弥左工門

野津利吉

三島嘉一郎

永瀬為三郎

永瀬石之助

永瀬太助

三島文一郎

三島金三郎

本常權十

本常太助

家原重次郎 信徒中

高橋運兵工

白石村

川島豊蔵

持田周太郎

内藤清市

小豆沢与四郎

天長地久干時明治十三年 辰 七月九日

修繕費之内

寄付人名

白石村戸長 小豆沢健造

用係 小豆沢林三郎

(明治13<1880>年7月9日道守稻荷社修葺棟札)

〔表〕

下津磐根^尔宮柱太敷立

奉修覆安道氷川神社一字

高天乃原^尔千木高知^豆

本願木幡久右衛門源忠良嫡男令之介源博良隱居質翁

惣氏子中

木幡吉左三門

安槻源之助

石原治平

坪内薰一

清水久平

馬田富八

葉山礼蔵

勝部宗之助

木幡茂市

田中吉郎

渡部忠次郎

栗原喜平

宮廻林左三門

中田平左三門

内藤甚平

小豆沢金一郎

大坪行蔵

長富理助

葉山三七

奥村樵哉

土江源八

佐藤理兵衛

安立藤太

小豆沢吉良兵三

遷宮安座神官

須藤貞十

佐藤太兵三

大坪高津平綱之

高田吉右三門

木幡善蔵

田中源兵三

新田千蔵

土江庄兵衛

齊間扇之助

三島文兵衛

山根宗兵三

福間嘉兵三

〔裏〕

島根県令從五位境二郎

島根
秋鹿郡長 千家尊賀
意宇

天長地久 千時明治十六年 未 五月五日

戸長 小豆澤金一郎

組長 高田吉右三門

新田千蔵

安立藤太

長富理助

大工 伊藤才蔵

木挽 糸川清蔵

檜皮 秋鹿郡大野村

栄六

〔裏〕

島根県知事正五位勲四等曾我部道夫

島根外二郡長正八位松島省一郎

宍道村長小豆澤金一郎

天長地久

干時明治廿八年乙未十一月廿八日遷座

(木幡修介氏蔵、明治28(1895)年11月28日三崎神社(中津祇園社・「宍道社」修覆棟札)

大工 棟梁 伊藤才蔵

木挽 新田儀右衛門

檜皮 秋鹿郡大野 栄六

(続)

『藝林』第48巻2号に続く

平成11年1月12日受理